

いこいの村 坂東明

題字 栗の木寮

2013年（平成25年）4月20日発行

第371号

発行責任者 いこいの村聴覚言語障害センター

所長 柴田 浩志

編集 いこいの村編集委員会

〒629-1242

綾部市十倉名畑町久瀬谷2番地

TEL (0773) 46-0101

FAX (0773) 46-0610

<http://www.kyoto-chogen.or.jp/ikoi>

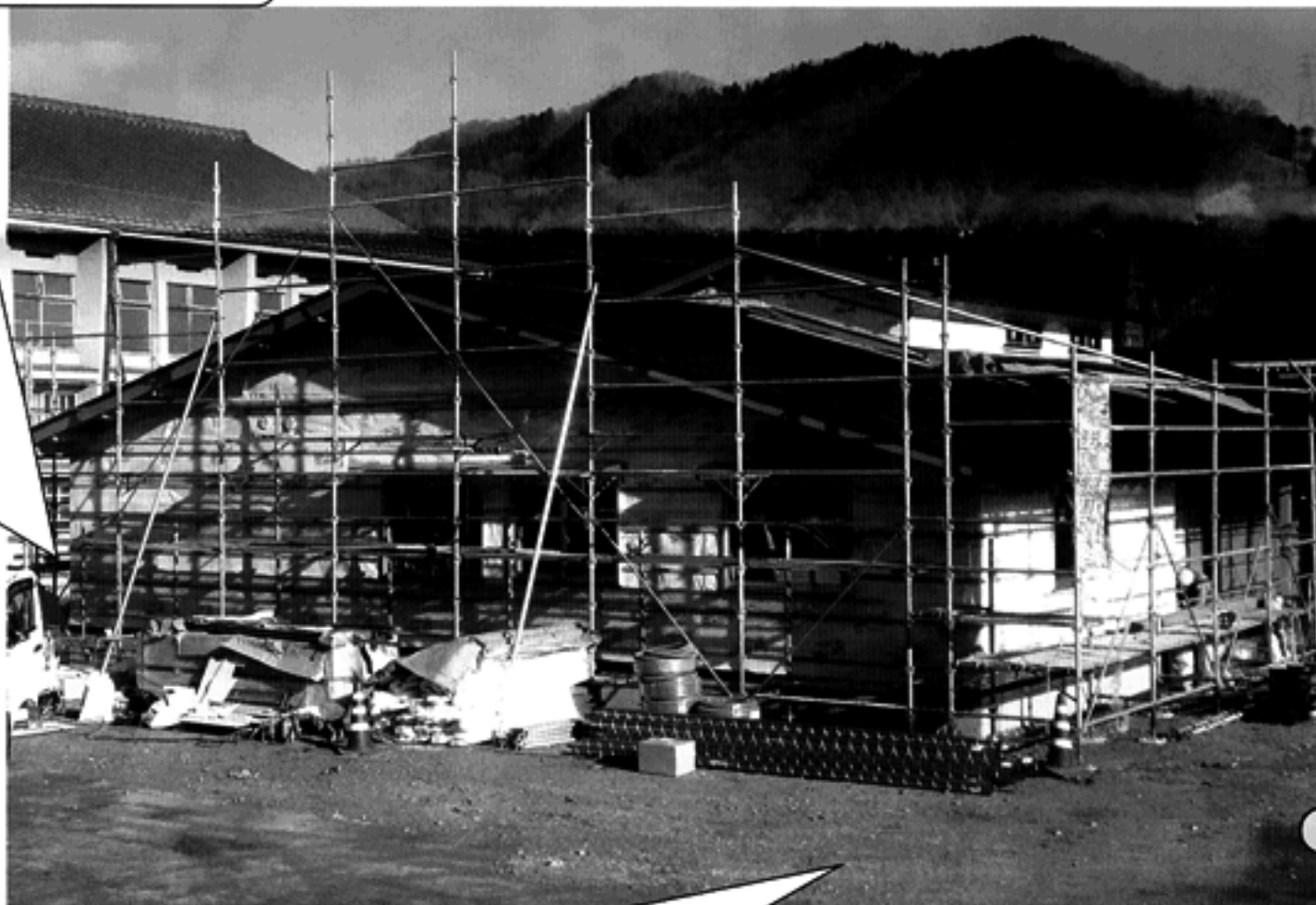


暖かい陽射しが入ります

工事が始まって約4ヶ月
外観ができてくるにつれ、利
用者の興味や期待も徐々に高
まってきました。
送迎の時、建物に近付くと、
「ちょっと車のスピードゆる
〜〜」
「まあ、屋根ができたな〜」
と、皆様工事の様子を気にさ
れています。
「初めての日は、皆で引っ越
しそば作って食べたいなあ」
「ぜひぜひしましょ〜」
などと、利用者と職員の間で
も話が弾み、完成を共に楽し
みに行っている毎日です。

デイサービス等の移転工事、

着々と進んでいます！



こんな立派なところで遊ばしてもいいんじゃないかあ、
百歳まで生きたいと思がったわ〜

ワシらの城が
だんだんできてきたなあ〜！

6月が待ち遠しいなあ〜

楽しみやなあ〜



高齢福祉部

デイサービス係

吉井 未央



玄関から見た中の様子

地域とつむぎ

口上林世話人会といこいの村後援会の活動

法人後援会と地元地域の
方々が一緒に歩み、今後の施
設運営を支えていくことを目
的とした口上林地区世話人会
が発足してから今年の七月で
十二年目を迎えます。

昨年度、各町区から選出さ
れた世話人の方々には年に三
回開かれる会議への出席、た
からの里で行われた「いこい
の村ツアー」や、京都市内で
開かれた「法人後援会総会」、
いこいの村30周年記念集會

での「福引き」など、様々な
面で支援いただき大変お世話
になりました。

十月初旬から十一月下旬に
かけては後援会員の拡大活動
のため世話人の方々といこい
の村後援会委員で各地域を回
らせていただきました。「遅
くまで活動」「苦労様」、「私
ができることなら喜んで協力
させてもらいます」など数多
くの温かいお言葉をかけてい
ただき、いこいの村の後援会

に対する期待の大きさを感じ
ました。
現在、口上林小学校運動場
跡地にテイサービスの移転工
事が行われていますが、五月
頃には世話人の方々と一緒に
敷地内に芝生を張る予定です。
いこいの村をはじめとして
法人後援会の皆様に支えて頂
いていることに感謝いたしま
す。深い絆をもってこれまで
歩んできた「地域とともに」
の精神を大切に、後援会活
動をさらに進めていきたいと
考えています。お一人お一人



福引きも盛り上がりました！

の力が集まれば、法人にとっ
てとても大きな支えとなりま
す。今後とも、皆様の一層の
お力添えを宜しくお願いいた
します。



いこいの村ツアーでの交流会の様子

コスモス寮へ避難訓練実施

(三月一八日)

出火場所は、二階居室。コ
スモス寮夜勤者が、消火器を
持ってかけつけ、栗の木寮に
火災報告と応援要請をして、
消防署へ通報、仲間を避難誘
導するという流れです。

担当した夜勤の職員、的確
に一連の流れをこなしました。
訓練終了後、「電話の側」、
施設住所と電話番号、連絡す
べき内容をあらかじめ書いて
貼っておくと良い」との助言
がありました。なるほど、こ
れなら通報時により的確に要
点を伝えられます。

今後も訓練を続けて、意見
を出し合い、災害に強い施設
を目指して頑張ります。

(いこいの村防災委員

渡辺元樹)

(いこいの村後援会担当

谷垣 毅)



自主防災

聴こえの豆知識 1

聴覚障害がある職員による
リレートークがはじまります。

いこいの村では、聴覚障害がある職員が九人働いています(栗の木寮四人、梅の木寮三人、北部聴言センター二人)。私たちは、重度重複障害の入所者(職員は、障害があっても対等平等と考え、「仲間」と呼びます)や聴覚機能が衰えていく高齢者の内面を代弁する役割と一緒に働く健聴職員に、聴覚障害への正しい理解を深める役割があると考えています。

ところで、耳が聞こえないとは、どんな状況でしょうか。

私は身体障害者手帳の第一種二級(聴覚障害の最重度は二級)です。両耳とも白テシベルなので、音言語は、聞こえません。補聴器をつけても聞こえていた頃の自分に

は戻りません。また音がいっても、音の発生源や何の音かは判断ができません。

日常生活には、非常に多くの音に満ち溢れています。目ざまし時計の音。洗濯機の音。炊飯器や湯が沸騰する音。私たちは、音によって、自身を確認しながら生きているのです。

耳が聞こえる人の聴力は、0デシベル。身体障害者手帳に該当するのは、両耳が70デシベル、または片耳が50デシベルともう一方が90デシベルの場合です。老人性難聴は感音性難聴といい、加齢によって聴神経の中の有毛細胞が欠けていくので、高い音から聞こえにくくなります。難聴者に、耳元で大きな声で話しかける人がいますが、「おはよう」「おあつ」「おはよう」は、「おあつ」と聞こえます。目をみてゆっくり、普通の声の大きさで口元を見せて話してください。



顔を合わせ、ゆっくりとお話します

また、一対一なら話せても複数の人々との会話になると難しくなります。家族の会話や井戸端会議が楽しめません。同じ時間空間にいるのに、会話が共有できないなんて、本当にもじめです。卑屈な気持ちになり、孤独です。「コミュニケーションの喜びや楽しみを失くすと、社会参加もできず、閉じこもりがちにもなります。この状況を改善するにはどうしたらいいのでしょうか? 次回からは、それぞれの体験を語ります。

いこいの村・栗の木寮
滝野 千里



いこいの村
聴覚言語障害セカ
所長 柴田 浩志

涙あり、笑いありの三〇周年
去る三月二十四日綾部市難聴者協会と綾部市要約筆記サークル「みみすく」の三〇周年を祝う会が、綾部市保健福祉センターで開催されました。

綾部市難聴者協会は、いこいの村・栗の木寮が開所した翌年の早春に、栗の木寮内で結成総会が開催されました。また、みみすくも難聴者協会と二人三脚で今日まで歩んできました。

初めに、長年にわたって難聴者協会やみみすくの活動に貢献された五人の方々に感謝状が贈呈されました。会食後の一言メッセージでは、難聴者の長尾淑子さんが「難聴者協会に入る前は、耳が聞こえないことから、もがいて、もがいて出口が見えない人生でした。しかし、難聴の仲間と出会い、要約筆記者と出会って、本当によい時代を迎える

ことができました」と語られました。

また、今回表彰を受けた要約筆記者の白波瀬まつるさんは「これからも難聴者のために書くのだということに大切に活動してください」と参加者を励まされました。

社会参加の実現をめざそう
祝う会に参加して、一日も早く全ての難聴者が、「難聴の仲間と出会い、要約筆記者と出会い、よい時代となった」と実感できる社会を実現しなければとの思いを強くしました。今年度、当法人では身体障害者手帳を有する京都府北部の聴覚障害者を対象に調査を行い、社会参加の促進に向けた実態把握と課題の整理を行います。



